

尾道の歴史と遺跡

中世編



平成 23 年 3 月

尾道市教育委員会

尾道の歴史と遺跡

- 中世編 -

発 行 日 平成 2 3 年 3 月 3 1 日
編集・発行 尾道市教育委員会

〒722-8501 広島県尾道市久保一丁目 15 番 1 号
TEL (0848) 25-7367

例　　言

- 1 本書は、平成22年度に国庫補助を受けて尾道市教育委員会が実施した「埋蔵文化財保存活用整備事業」内で作成した埋蔵文化財の広報冊子である。
- 2 本書の執筆は、西井 亨、中嶋将史、高垣真利子が担当し、尾道市教育委員会において編集した。
I - II 西井　　III 中嶋　　IV 高垣
- 3 遺物の写真撮影・挿図の整図は、特に記してあるものを除いて、西井、中嶋が担当した。
- 4 挿図中に方位を記入するものの北方位は、すべて磁北である。
- 5 本書で使用する地図は、尾道市作成によるものである。

目　　次

I	莊園と港町の成立	2
1	港町尾道の成立と発展	
2	当時の海岸線と	
II	瀬戸内海交易と海の道	5
III	水軍と城跡.....	4
IV	中世寺院と石造物.....	8
1	寺院のまち 尾道	
2	石のまち 尾道	

I 港町の成立と発展

1 港町尾道の成立

尾道という名前はいつ頃から使われていたのでしょうか。平安時代中期、永保元年（1081）に西國寺が再建されたとされる『西國寺文書』に尾道浦という記述がでできます。この頃の尾道浦は、まだ港町ではなく、海辺にそった小さな集落であったと考えられます。

その集落が瀬戸内海を代表する港町へと発展する契機となったことは、嘉応元年（1169）に備後国大田庄倉敷地に公認されたことによります。平安時代には、広大な世羅台地に広がる大田庄は、栄華を誇った平氏の領地となっていましたが、そこで作られた年貢米を京の都へ積み出す倉敷地（港）がありました。そこで、大田庄から近く、天然の良港として機能を備えていた尾道を大田庄の倉敷地とするよう、嘆願がだされたのです。

これが認められ、港町尾道が成立し、その後急速に発展していくことになります。平家から後白河院に寄進された尾道は、さらに文治2年（1186）に大田庄が高野山領として寄進されたことに伴い、同じく高野山領に編入されました。その後の文永7年（1270）には、『高野山文書』によれば、港町尾道に入港する船舶から、津料（関税）を徴収していたことも分かっており、独立した港町であったことをうかがい知ることができます。

また、寛元3年（1245）には、高野山から大田庄預所として、淵信が派遣され、尾道に住み、年貢米の管理と輸送にあたったとされています。弘安9年（1286）には、高野山から浄土寺と曼荼羅寺（現海龍寺）の別当職を与えられており、その後、浄土寺は定証上人により、伽藍が再建され、嘉元4年（1306）に落慶法要が営まれています。

こうして、14世紀初めには、有力者も存在し、港町として大きく発展を遂げています。



2 港町の歴史を探る

平安時代末に成立した港町尾道は、様々な有力者に庇護を受けながらも、問丸・梶取といった海運業者や商人たちにより、瀬戸内海を代表する港町へと変貌と遂げました。では、その発展の過程を知ることはできないのでしょうか。古文書では寺院や政治についての記述がほとんどで、どのように港町が発展したのか、人々はどのように生活していたのかを知る事がかりは、あまりありません。そうした港町の発展過程や生活の様子を知ることができるものとして、遺跡の発掘調査があります。

港町尾道は、840 年以上の歴史を誇り、その長い歴史の積み重ねのうえに、現在の尾道があると言えます。実際に現在の旧市街地の地下には、港町の遺構が堆積しており、尾道遺跡と呼ばれています。

尾道遺跡は、故土屋隆氏らによって発見され、昭和 50 年に第 1 次調査が実施されました。その調査では、室町時代の生活面が何層にもわたって、積み重なっていることが確認され、また、中国の元時代に作られた、枢府窯製白磁碗が出土し、港町の繁栄ぶりがうかがわれます。

その後も、市街地の開発に伴い、発掘調査が実施され、現在までに 190 回を超える調査が行われています。ただし、奥行きに比べて間口の狭い敷地での調査が多く、調査面積も 10 m² に満たない場合がほとんどであるため、約 37.3ha と推定されてきた尾道遺跡の面積に対して約 1 % の面積しか調査できていないのが現状です。そうした中でも、様々な遺構や豊富な出土遺物により、港町の形成過程が少しづつ解明されつつあります。次に尾道遺跡の発掘調査について、ご紹介します。



尾道遺跡の土層断面



尾道遺跡全景

3 尾道遺跡の発掘調査

尾道遺跡第1次調査（昭和50年 BC01 地点）

何層もの生活面が積み重なり、建物の柱穴や貯蔵用あるいはごみ廃棄用の土坑が複数確認されています。建物は何度も建て替えられ、整地されていた様子が分かります。



建物跡



建物跡

この調査では、中国製の青磁・白磁、朝鮮半島製の青磁、土師質土器と呼ばれる素焼きの皿・碗、備前焼（現岡山県）、瀬戸焼・常滑焼（現愛知県）、滑石製の石鍋、下駄や箸、漆碗などの木製品が多数出土しました。これらは、その後の調査地点でも多数出土しており、中世の港町に居住した人々の生活用具であったことが分かります。

特に、この調査で出土した、中国元時代の枢府窯製白磁碗は、発掘調査で出土した完形品として、国内でも珍しい一品であり、貴重な文化財です。



白磁碗出土状況

尾道遺跡第5次調査（昭和53年 FE01～04地点）

尾道遺跡の調査において、最も多くの遺物が出土しています。中国製の青磁・白磁や土師質土器、備前焼、常滑焼、瀬戸焼などの日本各地で作られた土器の他に大量の木製品が出土しています。中でも、写真のように木に墨で字が書かれた木簡や美しい文様が描かれた漆碗・漆皿が見つかっており、当時の生活の様子を知ることができます。

この地点からは、杭列や土止め遺構、土坑などが発見されています。これらは、住居に伴うものというよりは、港湾施設に関連した遺構と考えられます。この調査地点から南側では、これまでに遺構は検出されておらず、海を埋め立てた整地層が広がっています。これらは、江戸時代後期に加登灰屋橋本氏により埋め立てられた新開にあたり、中世には海であったと考えられます。出土遺物から確認された杭列などの年代は、14世紀から15世紀初頭に位置づけられ、この頃には、海が防地口のあたりまで入り込んでいたようです。

これまでの調査によれば、かなり北側まで入り江のように入り込んでいたと考えられ、この調査地点周辺が、港としての機能をもっていました。

防地周辺では、14世紀代にさかのぼる遺物が多数出土しており、その頃の港の中心地であったと考えられます。



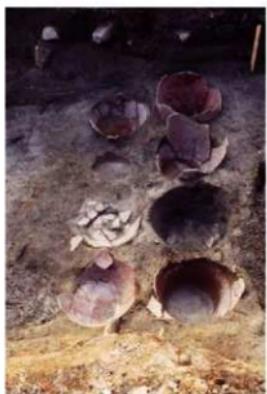
杭列



土止め遺構

尾道遺跡第7次調査（昭和54年 FI01～03地点）

この調査では、備前焼の大甕が8個体並んで出土しました。4個づつ2列、ほぼ東西方向に並んでおり、甕は下部が土に埋まっています。甕の底からは、炭化した米や粟が見つかったことから、穀物の貯蔵用の甕であることが分かります。これだけ甕が並んでいることから、穀物を商う商家であった可能性が考えられます。



備前焼大甕出土状況

また、大甕が出土した層のさらに下から、室町時代の海岸線とも考えられる石垣が発見されました。石垣は東西方向に設置され、その南側には、杭列も確認されています。

港の海岸線は、時代によって南下しており、現在の本通り商店街の南側に、中世の海岸線があり、徐々に埋め立てによって、現在の海岸線となったのです。



海岸線の石垣

尾道遺跡第8次調査（昭和55年 KG04~08）

この調査では、7面の生活面が確認され、室町時代から江戸時代にかけて継続して生活が営まれていたことが分かります。また、2層の焼土層が検出され、たびたび火災により建物などが焼失していたことがうかがえます。そのたびに同じ場所に建物を建て直し、町の人々は生活していましたのでしょう。こうした火災の痕跡は、他の調査地点との関係を探るうえで、重要な要素であり、港町がたびたび火災にあっていったことを示すとともに、古文書等の文献資料との比較により、火災の時期を特定する材料ともなります。文献では、元応元年（1319）に備後国守護の長井貞重が郎党ら数百人を尾道浦へ乱入させ、「政所・民家一千余宇」を焼き払ったという記述があります。こうした文献で分かる歴史を裏付ける証拠が、掘り出される日が来るかもしれません。



建物跡

尾道遺跡第12次調査（昭和56年 GB01）

狭い調査区域ながらも、建物の痕跡と区画がよく残っていました。港町は、狭い土地に建物がひしめき合っている場合が多いのですが、尾道も例外ではなかったようです。ただし、室町時代には、すでに現在の町並みの骨格が出来上がり、整然と区画されていたようです。建物の柱穴や垣根の跡、道路遺構が確認されています。



建物と区画

尾道遺跡第 20 次調査（昭和 57 年 EI01 地点）

室町時代末頃の建物に伴う基礎工事の痕跡が見つかりました。建物の壁には板材を用い、杭により固定しています。この建物は複数回建て替えられていますが、当時の民家もきちんと整地した上に建てられ、雨水等の対策もとられていました。建物の周りには排水溝も掘られていきました。



建物の基礎工事跡

尾道遺跡第 33 次調査（昭和 60 年 BG01 地点）

調査では、室町時代の海岸線の砂留めに用いられたと考えられる杭列が発見されました。こうした杭は板を固定するためのものと考えられ、当時の海岸線の様子が分かります。



杭列

尾道遺跡第 35 次調査（昭和 60 年 BJ02 地点）

井戸跡と石列及び杭列を確認しています。この井戸からは、銅鏡が発見されており、何らかの呪術に関係したものであると考えられます。

また、石列と杭列は、海岸線に伴うものであり、室町時代の海岸線を復元する材料となります。



尾道遺跡第 99 次調査（平成 4 年 JO01 地点）

木杭が 27 本と大量に発見されています。ほぼ東西に一定の間隔で、並んでおり、調査地点が海から離れているため、護岸遺構とは考えられませんが、防地川に関連した施設であった可能性があります。

杭列



尾道遺跡第 100 次調査（平成 4 年 BG02 地点）

建物跡と道路状遺構が検出されています。この道路状遺構は現在の本通りと直交しており、いわゆる小路のような通路があった可能性があります。

本通りは旧西国街道であり、近世には官道として整備されますが、中世の段階ですでに道路として、成立していたと考えられます。

これは、第 182・184 次調査（平成 14・15 年）地点でも同様の結果が得られており、中世の段階で港町の主要道路として整備されていたと考えられます。右の写真では、何回にもわたって、道路が整地されている様子が分かります。

道路を何度も整地した跡



以上のように、尾道旧市街地全域で 190 回を超える発掘調査を行い、様々な調査成果が得られています。現在、尾道遺跡で最も古い年代の土器が出土しているのは、防地口交差点周辺です。ここからは、13 世紀から 14 世紀前半の土器がまとまって出土しており、浄土寺や西國寺を後背にもつこの地域が、港町尾道の当時の中心地であったと考えられます。その後、長江や土堂といった地域でも、14 世紀の土器が見つかっていることから、徐々に西側に拡大していったのでしょう。

現在の旧市街地の原形ともいえる、中世の港町の姿は、少なくとも足利尊氏が尾道を訪れた 14 世紀前半には成立しており、その後、港の発展に伴い、少しづつ埋め立てて平地を増やしていくたとえられます。

こうした尾道遺跡の発掘調査により、少しづつ中世の港町の姿が解明されつつあります。今後も発掘調査により、新しい発見があるかもしれません。

4 港町瀬戸田と生口氏

これまで、発掘調査を通して、地下に埋蔵された港町尾道の姿をご紹介しました。ここでは、もう一つの代表的な港町である瀬戸田の発展について、触れたいと思います。

瀬戸田港は、生口島北西部、高根島が対岸にひかえ、幅 100m程の瀬戸田水道が航路となっています。このような地形は、港町尾道と同じであり、前面の島により風がさえぎられ、海面が穏やかであること、尾道水道や瀬戸田水道のような幅の狭い場所は、潮の流れが速いものの、船の出入りや航路へのアクセスが容易であることなど、天然の良港としての条件を備えています。

では、現在の瀬戸田港の原形、港町瀬戸田の成立はいつ頃だったのでしょうか。古文書等の資料でも記録があまり残っていないため、はっきりしたことは、まだ分かっていません。また、現在の瀬戸田港周辺の地下には、尾道旧市街地と同じように港町の遺構が埋蔵されていることが考えられますが、発掘調査が行われていないため、港町の成立と発展の過程を解明するには、もう少し時間がかかります。



瀬戸田港周辺



茶臼山城跡

いつ頃港が成立したのかは、分かりませんが、その地形から船の出入りがしやすいなど天然の良港であることから、早くから港ができていたのかもしれません。平安・鎌倉時代の生口島は荘園として、米などを都に送っていたのでしょうから、その積出港の役割を果たしていましたとも考えられます。

その後、南北朝時代になると、生口島には南朝方の勢力が茶臼山城に立てこもりますが、その勢力を打ち払い、生口島を支配下に治めたのが、小早川氏です。小早川氏は、北朝方として、因島や生口島などの島々の南朝方と戦い、そのまま支配下としています。生口島も南北朝時代に小早川氏の支配下となり、小早川宣平の子、惟平が生口島を治め、生口氏を名乗ります。

これにより、港町瀬戸田も生口氏の支配下となり、茶臼山城を拠点として、港の後背地には、俵崎城を築き、その管理にあたったと考えられます。また、周辺地域や海運を支配するためにも、その立地が非常に良い港であり、海上支配と水軍の発達に大きく貢献しています。その後の小早川水軍となる水軍の原形がこの頃から、できていたのではないでしょうか。

こうした、生口氏の成立と発展は、港町瀬戸田にも大きな影響を与えます。特に海運業者との関係を望む武家勢力には、港町尾道と同様に寺院に対する寄進が効果的な手段でした。瀬戸田水道を望む潮音山にある向上寺は、応永 10 年（1403）に仏通寺の末寺として創建されました。国宝三重塔は、永享 4 年（1432）に建立された細部に禅宗様式が施された美しい塔ですが、その寄進者として、発願者である信元・信昌とともに、生口守平という名前が文書に記されています。また、興福寺や広徳寺、法然寺といった中世に遡る寺院が港周辺に所在しており、生口氏は中世寺院や港町瀬戸田に深く関わり、海運業者との関係を強め、勢力を拡大します。それとともに、港町瀬戸田も周辺地域の拠点的な港として、大きく発展をとげます。

兵庫県神戸市の兵庫港は古くから主要な港として、発展をとげ、港には兵庫北閥と兵庫南閥といいういわゆる閥所が置かれていました。港には、瀬戸内海各地からの船が出入りし、尾道や瀬戸田の船も行き来していました。港に入港する際には、通行税が取られていましたが、その記録として、『兵庫北閥入船納帳』が残っています。

これは、文安 2 年（1445）に兵庫北閥を通過した船舶の記録で、その船の大きさや所属する港名などが記載されており、室町時代の海上交通を探る貴重な資料となっています。この記録によれば、瀬戸田船籍の入港船数は、23 回 68 艘で、瀬戸内海で 6 番目の多さとなっていて、9 番目の尾道より多かったことが分かります。瀬戸田船籍の船、瀬戸田船は生口船とも呼ばれ、生口氏の重要な物資の運搬にあたっていたと考えられます。

瀬戸田船が運んでいた品は、そのほとんどが「備後」つまり塩であったことが記録から分かります。その他に米や豆、小麦などの穀物類、金（鉄や銅のこと）、海産物などを多く運んでいたようです。特に多い塩は、中世の時代から、この地域の主要な産物であり、周辺地域から集められた塩とともに、各地に運ばれていたのでしょう。

こうして、港町として発展した瀬戸田は、その後の江戸時代や明治時代に入っても、製塩や海運の中心地として栄え、現在にもその繁栄ぶりを見ることができます。中世に遡る港町として、その町並みや寺院、港の遺構は後世に残すべき貴重な歴史遺産です。



5 港町と中世寺院

港町瀬戸田は、向上寺などの寺院に商人が様々な寄進を行い、商家の町並みとともに発展してきたことは、先に触れました。

では、港町尾道は、中世寺院とどのような関係にあったのでしょうか。

平安時代末期に大田庄の倉敷地に公認されてから、順調に発展を遂げてきた港町尾道に一つの転換期が訪れます。鎌倉時代末期に定証上人により再建された浄土寺に、九州へ向かっていた足利尊氏が訪れます。足利尊氏は、その後九州で勢力を蓄え、大軍を率いて京都に向かう際にも、再び浄土寺を訪れ、和歌を奉納し、戦勝を祈願します。



浄土寺本堂



浄土寺阿弥陀堂・多宝塔

なぜ、足利尊氏は、浄土寺を訪れたのでしょうか。浄土寺が源信以来、定証上人の再建に至るまで、港町尾道を代表する寺院であったことは、もちろんですが、それだけではなく、実際に浄土寺再建に多くの寄進を行った道蓮・道性のような港町の商人との関係を重視したことが考えられます。港町の商人にとって、海運の安全や商業の発展を祈る信仰対象が寺院であり、商人たちの拠り所ともなっていました。また、商人だけでなく、海運に関わる人々、舵取りや漁師などとの関係も重視し、浄土寺を通して、港町尾道を実際に取り仕切っていた人々を味方に引き入れたいと考えていたのではないでしょうか。

足利尊氏は吉和の漁師たちを水先案内人とし、その礼として、様々な特典が与えられ、それに喜んだ吉和の漁師たちが、踊ったことが吉和太鼓おどりの由来であると伝わっています。



吉和太鼓おどり



伝足利尊氏墓

こうした武家勢力と寺院の関係は西國寺や天寧寺、西郷寺、常称寺などでもみることができます。

西國寺は、行基による開基と伝わる古刹ですが、現在の伽藍は、金堂が至徳3年（1386）に再建され、三重塔は永享年間（1429～1441）に建立されています。西國寺は平安時代の院政期より朝廷との関わりが深く、官寺として大きな影響力を持っていました。室町時代に足利将軍家の権力が弱まると、全国各地の守護が力をつけていきますが、備後国の守護であった山名氏も、港町尾道を円滑に管理下に治めるため、西國寺に多くの寄進を行っています。特に明との交易を盛んに行っていた山名氏には、瀬戸内海交易の中心地でもあった尾道は非常に重要な拠点でした。



西國寺金堂



西國寺三重塔

天寧寺は、尾道の商人の発願により、二代将軍足利義詮により伽藍が創建されました。嘉慶2年（1388）には、五重塔も建立され、足利将軍家ゆかりの寺として港町尾道でも大きな影響力をもつようになります。三代将軍足利義満も厳島神社参詣の途中、天寧寺に宿泊しています。また、応永27年（1420）に李氏朝鮮の使節が日本に訪れた際の記録『老松堂日本行録』によれば、寺の敷地も広大で、参道には、商家が多数並び、人々でにぎわっていたようです。

尾道遺跡第9次調査（昭和52年 MQ01～06）では、創建当初の建物の礎石が発見されています。ここからは、多数の瓦も出土しており、大規模な伽藍が建っていたことを物語る貴重な資料です。発見された礎石建物は僧堂（禪堂）であると推定されています。



創建当時の礎石建物跡



出土した瓦

港町尾道には、他の町と異なる大きな特徴があります。それは、時宗寺院が6カ寺所在することです。西郷寺と常称寺は、ともに足利將軍家から庇護をうけ、伽藍を建立しています。西郷寺本堂は、文和2年（1353）に建立され、時宗寺院本堂として最古のものです。また、常称寺も暦応3年（1340）に足利尊氏により、七堂伽藍が建立され、その後火災により大部分が焼失しますが、本堂は残り、現在に至ります。室町時代に大門や観音堂も再建され、本堂と一体となった中世の寺院建築は非常に貴重といえます。



西郷寺本堂



常称寺本堂

港町尾道の中世寺院は、このように武家勢力の寄進や庇護を受けて、見事な中世寺院建築により再建・建立されます。しかし、そうした寺院は、尾道商人の信仰をあつめ、多くの寄進により発展したともいえます。瀬戸内海において、港町尾道は武家勢力の直接的な支配が及ばない商人や海運業者の町であり、こうした商人たちの拠り所である寺院との関係を強めることで、足利將軍家や山名氏は尾道を、または瀬戸内海における経済力・海運を手に入れようとしていたのでしょう。

II 瀬戸内海の交易と海の道

1 港町のにぎわい

港町にはたくさんの物資や情報が各地から集まります。特に大きな港である尾道と瀬戸田には、周辺地域からだけでなく、遠く九州や近畿地方、あるいは東北地方からも船が寄港していました。そうした港町の光景は、室町時代の武将、今川貞世（了俊）の紀行文『みちゆきぶり』にみることができます。

こうした港町の繁栄ぶりは、地下に埋蔵されている尾道遺跡から出土した様々な遺物からもみてとることができます。ここでは、出土遺物からみた、当時の港町の繁栄ぶりと人々の生活の様子をご紹介します。

尾道遺跡からは、数万点の様々な遺物が出土しています。それらのほとんどは、港町に生活していた人々が使用していた品であると考えられますが、そのほとんどは、別の場所で作られ、港に搬入された物です。遠くは中国や朝鮮半島で作られた物、また、日本でも東海地方や近畿地方、九州から運ばれてきた品々が多数見つかっています。

出土遺物は大きく分けると、土器、土製品、木製品、石製品、金属製品、瓦の種類があります。その種類ごとにご紹介していきます。

① 土器

土師質土器

素焼きの土器で「かわらけ」とも呼ばれます。その形状から皿・碗・壺・鍋・釜の種類に区分され、さらに大きさや細部の形状の違いにより、分けることができます。そうした細かな違いは、その土器が作られた時期の違いであるとみることができます。それは、遺跡から出土する遺物はその出土した土層が下であれば古く、上にいくほど新しくなる、つまり、土は上から少しづつ堆積していくという原則があります。よって、遺跡から出土した際に、その土器が出土した土層が上か下かによって、その土器が埋まった時期が古いか新しいかが分かります。



土師質土器



土師質土器鍋

このような土師質の皿・碗などは、尾道遺跡から大量に出土しており、出土遺物の6～7割を占めます。これは、この土器が日常的に使用されていたことを物語っており、食器として、港町に住む人々が使用していたと考えられます。また、大量生産品であることから、尾道の近隣の地域で作られていたことが窺えます。

瓦質土器

土師質土器が素焼きの土器で、赤みがかった色をしているに対し、瓦質土器は、瓦のような灰黒色をしています。主に鍋やすり鉢などの大型の土器がみられます。これらの土器は尾道遺跡から大量に発見されており、人々の生活必需品として使用されていたと考えられます。



瓦質土器すり鉢

国産陶器

中世には、日本各地で陶器の窯が築かれ、様々な陶器が焼かれます。そうした陶器は、物資の集積地である港町から多数発見されます。尾道遺跡からも、瀬戸焼、常滑焼、備前焼、東播系須恵器など全国各地の陶器が出土しています。

瀬戸焼

小皿、鉢、天目茶碗、四耳壺が出土しています。瀬戸焼は、現在の愛知県瀬戸市周辺で作られた陶器で、緑がかった釉薬に特徴があります。



四耳壺



鉢



天目茶碗

常滑焼

壺とこね鉢、すり鉢、大甕が出土しています。常滑焼は現在の愛知県常滑市周辺で作られた陶器で、灰色や褐色がかかった釉薬に特徴があり、比較的大型の陶器がみられます。



こね鉢



壺



大甕

備前焼

すり鉢、壺と大甕、小型壺が出土しています。備前焼は、現在の岡山県備前市で焼かれていた陶器で、褐色の素朴な釉薬とその種類が生活必需品であることに特徴があります。尾道遺跡では、特にすり鉢が多数出土しており、人々の生活に欠かせないものであったことが分かります。また、I章でご紹介した備前焼の大甕が8個並んで出土するなど、商売道具としても使用されていたと考えられます。



壺



すり鉢



鉢



すり鉢

東播系須恵器

鉢、すり鉢が出土しています。東播とは、現在の兵庫県東部地域を指し、その周辺で作られた土器を東播系須恵器と呼んでいます。灰色がかかった古墳時代の須恵器のような土器であり、尾道遺跡からも出土しています。



中国製陶磁器

尾道遺跡からは、日本以外の地域で作られた陶磁器も多数出土しています。特に中国宋・元時代の龍泉窯で焼かれた青磁や白磁は、当時の中国の重要な輸出品のひとつであり、日本でも珍重され、多くの中世遺跡から見つかっています。物資の集積地である港町には、青磁や白磁を交易品としてだけでなく、生活道具としても使用していたことでしょう。

また、中国製陶磁器は、中世の権力者たちにとって、ステータスシンボルでもあり、特に砧青磁などは、代々受け継がれ、現在は重要文化財となっているものもあります。

尾道遺跡から出土した中国製陶磁器には、青磁碗・皿、白磁碗・皿、青白磁合子、青花碗・皿、天目茶碗、茶入があります。それぞれの種類ごとにご紹介していきます。

青磁碗・皿

尾道遺跡から出土している中国製陶磁器の中で、最も多く出土しています。青磁碗は、表面の文様や高台（土器の下部の台部分）の形状により、作られた時期が分かれます。青磁碗の表面には、蓮弁文と呼ばれる蓮の花びらのような文様がみられ、みこみ（内部底面）に印花文と呼ばれる植物の文様が彫られています。こうした文様などから分かる青磁の年代は、尾道遺跡では 14 世紀から 15 世紀頃にかけてのものが多くみられます。青磁皿の底に墨で「十」と書かれたものも見つかっています。



白磁碗・皿

尾道遺跡から出土した白磁碗は、それほどありませんが、特に重要なものとして、第1次調査で出土した枢府窯白磁碗があります。これは、発掘調査で出土した完品の枢府窯白磁碗として、日本国内で唯一の土器であり、内面にみられる鳥の文様など、その美しさは素晴らしいものがあります。こうした土器は国内でも大規模な中世遺跡から出土しており、限られた人々が入手できる、貴重な品であるということができます。港町尾道の有力者が所有していたのでしょうか。



天目茶碗・茶入

中国で作られた天目茶碗や茶入が出土しています。これらは、主に茶器として使用されたと考えられます。港町の文化を感じることができる一品です。



朝鮮半島製陶磁器

中国製陶磁器に比べると数は少ないですが、朝鮮半島で作られた陶磁器も出土しています。朝鮮製は、象嵌と呼ばれる技術で描かれた文様や、三島手と呼ばれる独特の文様に特徴があります。



② 木製品

木簡

木に墨で字が書かれた物を木簡と呼びます。古代・中世では、紙は貴重品であり、一部の人々が使用していたのですが、多くは木に墨で字を書いていました。尾道遺跡でも木簡が出土していますが、こうした木製品が当時の状態のまま残っていることは、珍しいことです。福山市草戸千軒町遺跡でも多数の木製品が出土していますが、地中深く埋まり、かつ地中の水分が多く、空気に触れなかったために良好な状態で残っているのです。

木簡は書かれている内容により、種類が分かれますが、尾道遺跡では、荷札木簡や呪符木簡が出土しています。荷札木簡は、その名前のとおり、荷物などにつける荷札として使用された木簡です。下の写真は、「乃米まんところより」（のうまいまんところより）と書かれており、米（年貢）をまんところ（政所）に納めるといった内容と考えられます。政所は当時の役所の様な場所であり、政所が尾道にあった可能性を示唆する貴重な資料です。他にも「寺大豆二斗十口」と書かれた木簡もあり、寺院との関連性をうかがわせます。



また、呪符木簡は、いわゆる「まじない」に使われた木簡で、「急々如律□天口八万四千神□」と墨書された木簡には、火や水といった文字も書かれています。こうした木簡をどのように使用していたのかはよく分かっていませんが、疫病よけ等の中世のまじないの一種であると考えられます。

漆椀・皿・折敷

下の写真は、発掘調査で出土したばかりの漆椀です。地中の水分が多いためよく残っており、下地の黒漆に朱漆の文様が鮮やかに浮かび上がっています。鳥や植物の文様が見事に描かれ、非常に高度な技術により、作られた漆椀です。また、その隣の写真は、黒漆に朱漆で三ツ巴の文様が描かれた漆皿です。



他にも、カエデや菊などの植物や、鶴、亀甲文が描かれた漆椀・皿が多数出土しています。こうした漆製品は、他の地域から持ち込まれた物であり、交易品であるとともに、生活用具としても使用されていました。

このような木製品は、上の写真のような発掘された当時のままで保存することは難しく、科学的な保存処理を行う必要があります。現在、尾道市では、美しい状態を保てるように保存処理を行い、展示などに活用しています。



漆椀



漆皿



杓子状木製品・箸状木製品・曲物・下駄

人々の生活に必要な道具も多数出土しています。杓子状木製品や箸状木製品はその名前のとおり、杓子や箸として使用されていたと考えられ、また、曲物は現在でも伝統工芸品として製作されています。こうした道具類は中世で既に製作され、使用されており、現在までその形状や使用方法は変わらず受け継がれてきています。



杓子状木製品



箸状木製品



曲物



下駄

羽子板状木製品・鋤先

その他に、羽子板が出土しています。現在でも行われる羽子板は、中世には魔よけの意味も込められており、遊びであるとともに「まじない」でもありました。中世から長く受け継がれる伝統的な遊び道具であるといえます。

また、農耕具である鋤は、鉄製品もありますが、一般に普及していたのは、木製の鋤が多いようです。港町周辺にも田畠が広がっていた様子がうかがえます。



羽子板状木製品



鋤先

③ 土製品・石製品・金属製品など

土器や木製品の他に土製品・石製品、金属製品、さらに鹿角製品などがあります。下の写真は滑石という加工しやすい石で作られた鍋です。表面には、加工時の工具の痕が明瞭に残っています。この滑石は、現在の長崎県西彼杵半島で産出された石で、この滑石製石鍋は西日本の港町の遺跡から多く出土しています。

また、硯も多数見つかっています。硯は粘板岩や頁岩といった加工しやすい石で作られたものが多く見つかっています。



滑石製石鍋



硯

右の写真は、フイゴの羽口です。これは、鉄などの鍛治に使用します。鍛治で火を強くする際の風を送る装置で、尾道遺跡からは多数出土しています。港町で活動する鍛冶屋が多かったのでしょうか。現在でも残る鍛冶屋町という地名は、江戸時代に鍛冶屋が存在していた明らかな証拠ですが、中世においても既にそのような職人が多数住んでいたことを物語っています。今後、発掘調査で鍛冶遺構が発見されれば、尾道の職人たちの活動の内容が分かるかもしれません。

また、金属を研ぐ砥石も多数出土しています。鍛冶職人が使用したものや、港に住んでいた人々の生活で使用したことが考えられます。

この他に土製の錘が多数出土しています。錘はその形によって、釣り竿用と網用に分けられます。特に網用の錘が多数出土しています。港町に住む漁師が使用していたのでしょうか。

また、用途不明の円形土製品が多数出土しています。通常、メンコと呼んでいますが、どのように使用されたのかはよく分かっていません。その素材として、土器や瓦が再利用されています。



フイゴの羽口



砥石

中世において、鉄や銅といった金属製品はとても貴重品でした。尾道遺跡から出土している金属製品には、鉄斧、鉄釘、銅製笄、銅鏡、銅鏡、銅製小碗などがあります。

尾道遺跡からは、銅鏡が2枚出土しています。どちらも井戸跡からの出土で、そのうちの1枚には写真のように呪文が墨書きされた木札が重なっていました。これは、「まじない」に使用されたものと考えられ、人々の生活に欠かせない井戸に納められたものと推定されます。この「まじない」の一例として、同じように鏡と木札、銅鏡が埋納されていた三次市山崎遺跡の出土遺物があります。



銅鏡と木札



銅錢（木梨遺跡出土）

この銅鏡の他にも「まじない」の例として、土師質土器碗を二つ重ねて、その中に銅鏡を入れたものが見つかっています。このような「まじない」にどのような意味があるのかまだ分かっていませんが、中世の精神世界を探る貴重な資料となると考えられます。

また、右の写真のような、五輪塔形木製品も出土していることから、港町に住む人々の信仰の様子が分かります。



五輪塔形木製品

右の写真は、銅製の笄（こうがい）です。笄は頭に飾る装飾品の一つで、銅製だけでなく、角製の笄も出土しています。



鹿角製笄



銅製笄

2 交易と海の道

瀬戸内海は、海の道（航路）により、各地域の港町とつながり、波も穏やかであることから、陸路よりも迅速にかつ大量にまた安全に物資を運ぶことができるという、交易にとって格好の条件を備えています。特に外国との交易が盛んになった平安時代以降、交易船の中継地として、また、物資の集積地として港町は飛躍的に発展をとげます。

尾道も日本各地への大型船の停泊地であり、瀬戸内海周辺からの物資の集積地となり、瀬戸内海の中央に位置する立地もあって、商業や海運業の中心地となつたのです。そこに集まる物資は、瀬戸焼・常滑焼・備前焼といった日本各地の陶器、九州産の滑石製石鍋、中国や朝鮮半島製の陶磁器など、多様な品々がみられます。また、米や塩、鉄といった周辺地域からもたらされた品々が日本各地へ運ばれました。

そうした物資により、港を取り仕切る商人たちは莫大な利益をあげ、港町が拡大し、多くの寄進により、寺院の建物や石造物などが建てられていったのです。



港には、様々な商品を扱う商人、石細工や木製品などを手の手業者、海上交通や荷揚げなどを取り仕切る海運業者がいて、彼らが港町を取り仕切っていたと考えられます。この海運業者たちは、海の道を管理する海賊衆とも連携し、戦争時には、水軍に関わる者として、平常時には海の道により、各地との交易を行う者であったでしょう。この海賊衆や海運業者については、次の章で詳しく触れることとします。

また、港町尾道には、多数の手工業者たちが存在したことが資料により分かっています。刀鍛冶や石工はその代表ともいえます。刀鍛冶は尾道住の其阿弥が代々刀鍛冶として、刀を作成し、他にも多くの鍛冶職人がいたと考えられます。江戸時代やその後も続いた鍛冶業は、地名に鍛冶屋町と残るなど、現在でもその痕跡をみることができます。

石細工は尾道で中世から近世にかけて、飛躍的に発展しています。尾道に住んでいた石工もたくさんいて、日本各地にその名前が彫られた石造物をみることができます。中世の尾道には、多数の石造物が作られ、貴重な歴史遺産として、現在に残っています。石造物と石工については、IV章で詳しく触れたいと思います。

III 水軍と城跡

1 中世の城

「城」。この言葉は、現代を生きる我々にとって壯麗な大櫓（天守）と反り立つ石垣に象徴される近世城郭をイメージさせます。しかし、近世城郭は、長い歴史を持つ日本の城では最も遅く登場したものであり、完成形態と言うべきものです。郭や建物配置の計画性、防御機能、外部に対する象徴性と威圧度、軍事拠点とは思えない均整のとれた美しさは、近世以前の城とは比べものになりません。

日本の歴史の中で、「城」はいつ頃登場したのでしょうか。「城」は、防御を第一の目的としたものです。人間は世の中が緊張状態に入ると、敵の攻撃を防ぐためにこの施設を作っていました。古くは、弥生時代の環濠集落、古代の城や柵あるいは都城、中世の領主の居館や山城、砦、さらには環濠で囲まれた寺内町、そして江戸時代末期において異国船を打ち払うため各地に築かれた砲台なども、広義の「城」に含まれる防御施設です。このような場所は、防御拠点であると同時に戦闘拠点でもあり、その他、支配拠点や集会所などとしても使用され、実に様々な役割を持った場所でした。

「城」と呼ばれるものの大半は、戦国時代から安土桃山時代を経て、江戸時代初期までの半世紀ほどの間に築かれた山城であり、その数は4万ヶ所を超えると言われています。この数は、死と隣り合わせの日常という戦乱の世の実情を反映したものとなっています。しかし、豊臣秀吉が天下を統一して戦国の世を終らせると、天正19年（1591）山城停止令を発して、山城の築造を禁止させました。また、豊臣秀吉の没後の慶長20年（1615）に起こった大阪夏の陣の直後には、徳川幕府が一国一城令を発したため、その数は約170城まで激減しました。その後は、城の新築はもとより増改築さえも幕府の許可なしには一切できなくなりました。

尾道市の周辺多くの城跡が確認されています。丘陵部、沿岸部、島嶼部など、多様な地形により構成される尾道市には、現在までに85ヶ所の城跡が存在しています。しかし、その存在はほとんど知られていません。なぜなら、城跡は、長い年月の経過によって木々に覆われ、自然の山へと帰っていくからです。江戸時代の俳人である松尾芭蕉が“奥の細道”の中で「夏草や兵どもが夢の跡」と詠んでいる情景は、まさに中世において栄華を夢見て戦った兵どもと彼等が築いた山城の虚しさを伝えています。忘れ去られたものが多い城跡ですが、有力者が築いたものである以上、その動向をよく示すものであり、地域の歴史に密接に関係する重要な歴史遺産です。

2 城の構造

中世城館の移り変わり

平安末期から鎌倉初期にかけて、有力者の居館は、方形区画の堀を巡らせるようになり、複数の郭を配置して、各郭で機能を分担する、いわゆる「城館」が成立します。

南北朝時代では、鎌倉幕府の権力の弱体化に伴って武士団が独立しました。武士団は、他の勢力からの攻撃を防ぐため、山上に臨時の軍事施設である山城を築きました。山城は、自然地形自体が防衛の役割を持ち、要所に人工の防御施設（堀・土塁・柵・塀）を作るだけで城としての機能を十分に果たしました。また、山上は平地よりも視野が開けているため、敵の進攻を察知しやすく、少人数でも守りやすいなどの利点がありました。

戦国時代前期では、本来は非常であったはずの戦が日常化したため、山城の各防御施設の工夫が進み、長期の籠城（ろうじょう）に備えて郭を広くするなどの発展が見られました。しかし、戦国時代後期になると、有力者は領國經營のために交通の便が良く、城下町の支配が行いやすい小高い山の上に城を築くようになります。この城は平山城と呼ばれます。そして、鉄砲の伝来と普及によって攻撃射程が拡大したことや領國經營の効率化などの理由から、次第に平地に城を築くようになりました。この城を平城と言います。

城のしきか

中世の城には、土を切り盛りするだけの単純なしきかが各要所に作されました。城という字が「土」と「成」から構成されるゆえんともなっています。



3 尾道の主な城跡

尾道には、現在までに 85ヶ所もの城跡が確認されています。これらは鎌倉、南北朝、室町、戦国と各時代において必要に応じて築かれ、短い期間で幕を閉じる城もあれば、改修・強化により長きにわたって戦略的な拠点であり続けた城もありました。

御調

丸山城跡 丸山城跡は、戦国の世の明応年間、三次地方の豪族三吉氏が御調町周辺まで勢力を伸ばした時、その家臣である上里氏が城主として入ったとされている。上里氏は、同三吉氏家臣である雲雀城主の池上氏や牛の皮城主の森光（守光）氏と行動を共にしたとされ、山陰地方の戦国大名・尼子晴久に従つて、旧主の三吉氏を攻撃したとも伝えらる。詳細は不明だが、天正 18 年（1590）に落城している。



雲雀城跡 雲雀城跡は、雲雀山に築かれた城で、御調町域の主要通路を含む地域を見渡すことができる。山頂の削平地に主郭が存在し、その南西に深さ約 14m、幅約 3m の堀切を配して、主郭と尾根道を分断している。主郭の東側や北側にはいくつかの郭が段状に配置され、これらの方向からの攻撃を意識していたことがわかる。堅堀や土塁、井戸跡なども確認されている。

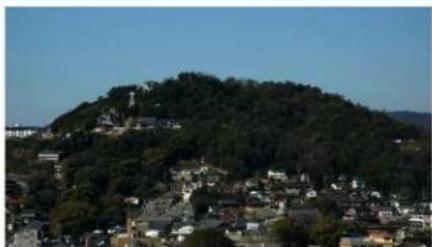


尾道

鳴滝山城跡 鳴滝山城跡は、尾道水道の西口を見下ろす鳴滝山の頂上に築かれている。鎌倉時代末期に築城されたといわれ、室町時代には宮地氏が小串山城跡、太夫殿城跡、七曲城跡などの支城と連携しながら周辺海域の水運を掌握したとみられる。応永 30 年（1432）、宮地恒躬の代に対立していた大平山城主・木頃經兼の攻撃を受け、当城は落城し、恒躬も戦死している。この時、その子の明光が因島村上氏を頼り、因島に移ったと伝えられている。



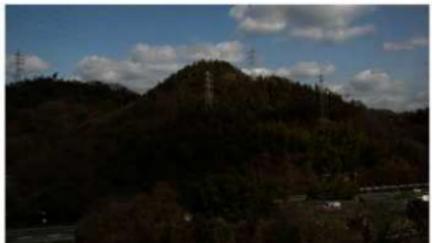
千光寺城跡 千光寺城跡は、尾道のまちを見下ろす千光寺山の頂上に築かれた。当城は、天正年間に木梨杉原氏の七代元恒により築城されたと伝えられる。一方、『善勝寺文書』によれば、元恒の父元清（隆盛）が千光寺城主と記されており、永禄年間には築城されていたとも考えられている。瀬戸内有数の港町尾道を支配する絶好の場所に位置していたが、天正19年（1591）、豊臣秀吉による山城停止令のため廃城となっている。



家ノ城跡 家ノ城跡は、木梨杉原氏の本城である鷺尾山城跡のふもとの小高い丘の上に築かれている。言い伝えでは、杉原為平が築城したといわれる。当城は、頂部郭と北西尾根を中心に発掘調査が実施され、建物跡をはじめ多くの遺構や遺物が出土している。銅製懸仏（かけぼとけ）と銅錢6枚等が出土した土坑もある。郭の北西側に位置する幅6～8m、深さ約2mの堀切は、全体を掘り切るのではなく、中央部を土橋状に高く残し、通路として使用していたようである。



松尾山城跡 松尾山城跡は、港町尾道への東側からの進入口である坊地峠にさしかかる道を見下ろす松尾山に築かれた城である。当城周辺の太田地区は、南北朝時代、足利尊氏に従軍した杉原兄弟が戦功により与えられた土地のひとつである。その後、兄弟は木ノ庄木梨と高須を各々で支配する形を取り、やがて木梨杉原と高須杉原へと分家した。松尾山城跡は高須杉原氏が居城し、戦国時代、木梨杉原家が尼子方、高須杉原家が毛利方につき従い、一族の命運を分けている。



岡島城跡 尾道水道に浮かぶ岡島（宇賀島）に築城され、元は宇賀島衆と呼ばれる海賊らが根拠地としていたとされる。宇賀島衆は、周辺海域で航行船舶から礼銭、関料を徴収していたようである。その様子は、『老松堂日本行録』や『梅林守龍周防守下向日記』などに記されている。しかし天文23年（1554）頃、海賊衆・因島村上氏と結んだ小早川氏によって滅ぼされている。その後、岡島城には向島経営に乗り出した因島村上氏の支城とされたようである。

余崎城跡 余崎城跡は、向島南部の半島状に突き出た観音岬に築城され、「芸藩通志」によれば村上吉充の居城といわれる。弘治元年（1555）の敵島合戦により向島を得た因島村上氏が、当城を向島経営の拠点としていたのではないかと考えられている。しかし、村上吉充の在城は短く、永祿10年（1567）には因島の青木城に本拠を移している。以後、余崎城跡には、村上氏の武将・官地大炊助明光の次男鳥居（島居）次郎資長が居城したといわれる。



因島

青陰城跡 青陰城跡は、因島のほぼ中央部、風呂山と龍王山に挟まれた青影山頂に立地する。この城は、鎌倉時代末期から南北朝時代初期頃に活躍した村上義弘が南朝勢力として居城したという伝承がある。戦国時代においては、村上氏が大名の性格を帯びはじめると本拠城としての役割を果たしたとされる。後、村上水軍の第一家老教井太郎左衛門尉義親の居城と云う。元弘年間から慶長元年、10代目の村上吉亮が生涯を終えるまで約260年間本拠地としてあり続けた。



馬神城跡 馬神城跡は、因島の北西部に存在する城跡で、因島村上氏が第三の本拠とした青木城とは約1km離れた場所にある。当城は、海に面して広い海域を見渡すことができるため、海上を航行する船を監視する目的で築城されたのではないかと考えられる。山頂部の郭とその一段下の郭は広い平坦面を有しており、良好に遺存している。また、北側麓の岩礁（がんしょう）には、桟橋（さんばし）の柱穴である「岩礁ピット」が存在するとも言われている。



青木城跡 青木城跡は因島の北西部に位置し、港町尾道の西口を押さえる場所にある。城跡周辺は埋め立てられ、陸地となっているが、当時は海に囲まれていたと考えられる。標高50mの竜王山の頂を中心、尾根上に複雑な郭が設けられている。本城跡は、村上新蔵人吉充が永祿10年（1567）に向島の余崎城から移り、慶長5年（1600）に青陰城に移るまでの居城であったと伝えられている。



美可崎城跡 美可崎城跡は、三ヶ崎の先端部に位置し、宝亀2年（771）安芸国の中北部瀬戸を守る海の関所が置かれたと伝えられる。室町時代は、因島村上氏が金山氏を奉行として置き、備後灘を行く船から運航税を徴収していたようである。主郭の北東に二の郭を構え、周辺は急斜面により、海に面しています。岬の南側にある入江が「舟隠し」ともいわれる。半島の突端には、金山氏にまつわる伝説を持った地蔵石（鼻の地蔵）が地域の信仰をあつめている。



一ノ城跡 一ノ城跡は三庄湾の北、奥山の尾根の鶴ヶ峰を中心に最上部から東に向かって2段の郭があり、一方北東に向かって7段の郭が一列に並ぶといった縄張りとなっている。その中の郭の一部に堀切を明瞭に確認することができる。当城跡は、平安時代末期の源平合戦の時、家方がこもったと城とも言われる。また、小早川氏の居城とも伝えられ、北側の椋浦には土居屋敷（城見屋敷）や小早川氏の墓と伝えられる五輪塔数基が現在も残っている。



茶臼山城跡 茶臼山城跡には、主郭の南西側および南に郭が確認できる。また、南西辺には帯郭も認められる。北と東側に段状地があり、東側山麓に屋敷跡があると伝えられている。南北朝時代に大鳥伊予守義直が居城したといわれ、頂上には茶臼山城主の碑が建てられている。当城跡は、海に面しておらず、因島の中央部にあり、街道を見張る山城であったと考えられる。



生口島

茶臼山城跡 茶臼山城跡は、生口島を南北に二分する山々のうち、観音山の一丘陵頂部に築かれている。主郭の北東側と南西側にそれぞれ郭が確認されている。全体的に小規模な縄張りとなっています。南北朝時代では、南朝方が拠ったとされ、康永元（1342）年に小早川氏に落とされている。『芸藩通志』には戦国期の海賊衆・生口孫三郎景守の城とされており、俵崎城や瀬戸田の町並みや港を望む詰城の機能が考えられている。



4 発掘された中世城館

「城は支配者が合戦や支配のために築くもの」との見方が一般的です。しかし、発掘調査の成果によって、山城にも様々な形態が存在し、それぞれが役割を持って機能していたことが分かっています。その性格の違いを見分ける材料は、立地、地形と防御施設の組み合わせによる防御力の高さ、生活の痕跡から判断される城の機能した期間などがあります。尾道市で発掘調査された城跡は、牛の皮城跡、末近城跡、丸山城跡、俵崎城跡の4城跡があります。

牛の皮城跡（尾道市御調町大町） 牛の皮城跡は、御調川を臨む険しい丘陵に築かれた山城です。北郭群と南郭群から成り、畝状堅堀と堀切によりほぼ全方角への攻撃に対応しています。城主は、戦国時代後期の人、森光新四郎景近と伝わっています。

牛の皮城跡は、南郭群（標高 230m付近）と北郭群（標高 150m付近）で構成され、天然の要害の地に防御施設を多く配置する堅固なつくりの城となっています。発掘調査が実施された北郭群は、5つの郭を尾根に沿って段々に築き、東側と北西側に多くの畝状堅堀群を配置して防備を高めています。南西側に見られる二重の堀切は、南郭群への進攻を妨げるために道を分断しています。各郭において建物の痕跡は確認されていませんが、鉄釘が多く出土していることから何らかの簡易な建物が存在した可能性があります。北郭群高所の1~3郭では、15世紀末から16世紀前半の土師質土器皿や輸入陶磁器などの食器類をはじめとする生活道具が多く出土しており、生活の主要区画であったと考えられています。また、低い地点の4・5郭では生活用具は少なく、周囲の畝状堅堀群と土星によって下方の攻撃に備える区画であったようです。

南郭群は発掘調査が行われていませんが、畝状堅堀を西側、南側、東側に配置しており、北方に防御施設が見られないことから、北郭群にその役割を負わせ、南と北の郭が連携することでおよそ全方向からの城攻めに対応していたものと考えられます。



写真 牛の皮城全景



写真 発掘調査写真①



写真 発掘調査写真②

末近城跡（尾道市御調町植野） 末近城跡は、野間川を望む低い丘陵上に築かれた山城です。野間川沿いの交通の要衝を押さえ、野間・植野の境を見渡す場所に築かれた軍事的機能の低い「村の城」と考えられています。

末近城跡は、丘陵頂部が方形状に造成されて主郭を成し、北西側と南東側に伸びる長細い平坦面も城の一部（帶郭）である可能性があります。そして、主郭から北西側の帶郭への途中には薙研形状の堀切が存在しています。南西側の帶郭にも防御用施設が存在する可能性はありますが、いずれにせよ小規模な城跡です。発掘調査は主郭を中心として調査が実施され、主として掘立柱建物跡と近世の墓壙（墓穴）が多く検出されました。城跡にともなう遺物はわずかしか出土していません。末近城跡は、戦国期の末近氏の居城と伝わります。しかし、小規模で軍事的な機能は低く、生活痕の乏しい様子からは領主の支配拠点を想定することできませんでした。また、近世墓壙の存在から戦国期には城の機能が停止し、その後、墓地として利用していることが明らかになっています。このような場所は、非常時の避難場所、または集会所などに広く利用された特別な空間、いわゆる「村の城」と考えられています。



写真　末近城跡全景



写真　発掘調査写真

丸山城跡（尾道市向島町） 丸山城跡は、向島東部の沿岸に伸びる低丘陵を利用して築かれた山城です。当城跡は、向島経営に乗り出した因島村上氏の支城と思われ、本拠の城である余崎城跡と連動し、海上の監視と通信の役割を担っていたものと考えられる「海城」です。

丘陵の頂部は開けた平坦地となっており、城の中心部となる主郭と考えられます。主郭の海側（東側）は道路建設によって削られているため、もう少し規模の大きな主郭であったと考えられています。そして、主郭の南側から西側にかけて帶郭が取り付いています。城跡が立地する低丘陵は、西側の丘陵部へとつながりますが、堀切によって分断しています。

主郭上からは、建物の柱穴跡と考えられる遺構が確認されていますが、簡易な建物と推測されます。出土遺物もさほど多くはありませんが、15世紀後半から16世紀前半までのものが確認されており、一定の期間生活を行っていたことがわかります。

因島村上氏は、内海権をめぐって毛利氏と陶氏が争った元治元年（1555）の厳島の戦いで毛利方として活躍しました。その戦功として小歌島を含む向島一円を領有するようになり、因島の長崎城から向島の余崎城へと移りました。丸山城跡は、海に面した場所に築かれていることから、海上の監視と通信の役割を担っていた可能性の高い城跡です。

俵崎城跡（尾道市瀬戸田町瀬戸田） 俵崎城跡は、生口島の北西部にあって、佐木島・高根島に挟まれた水道のほか、三原湾、因島を見渡すことのできる眺望の良い低丘陵に築かれた山城です。当城跡は、沼田小早川氏の庶流の一族・生口氏の館的な性格を持った山城と考えられ、瀬戸田の町と港湾の監視・警護活動の拠点であった可能性が考えられます。

当城跡は、標高約30mの最頂部を主郭として、北側から南東側にかけて3つの郭が存在しています。主郭西側の下方には堀切、北西側には畝状に並ぶ2条の堅堀が配置されています。出土遺物は、14世紀後半から16世紀後半までの土師質土器のほか、輸入陶磁器、備前焼の甕、肥前系の陶磁器など多くの生活用具が見られます。城としての機能を高めたのは、土器の出土量や遺構の内容から16世紀前半以降と考えられています。この頃、主郭には礎石建物が建てられ、柵または塀の巡る土塁や堀切、堅堀が構築されていることから、長期にわたる拠点として整備されたことがわかります。低い山に立地すること、比較的広い郭を持つこと、防御施設をよく整え、建物を置いていることなどから、当城は館と城の両方の性格をあわせ持った城として機能していたのではないかと考えられます。そして、詰めの山城としての性格が強い茶臼山城跡と連動して生口島北部を支配していたと思われます。

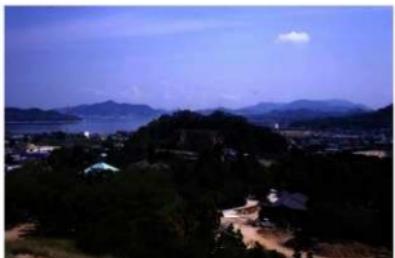


写真 俵崎城跡全景



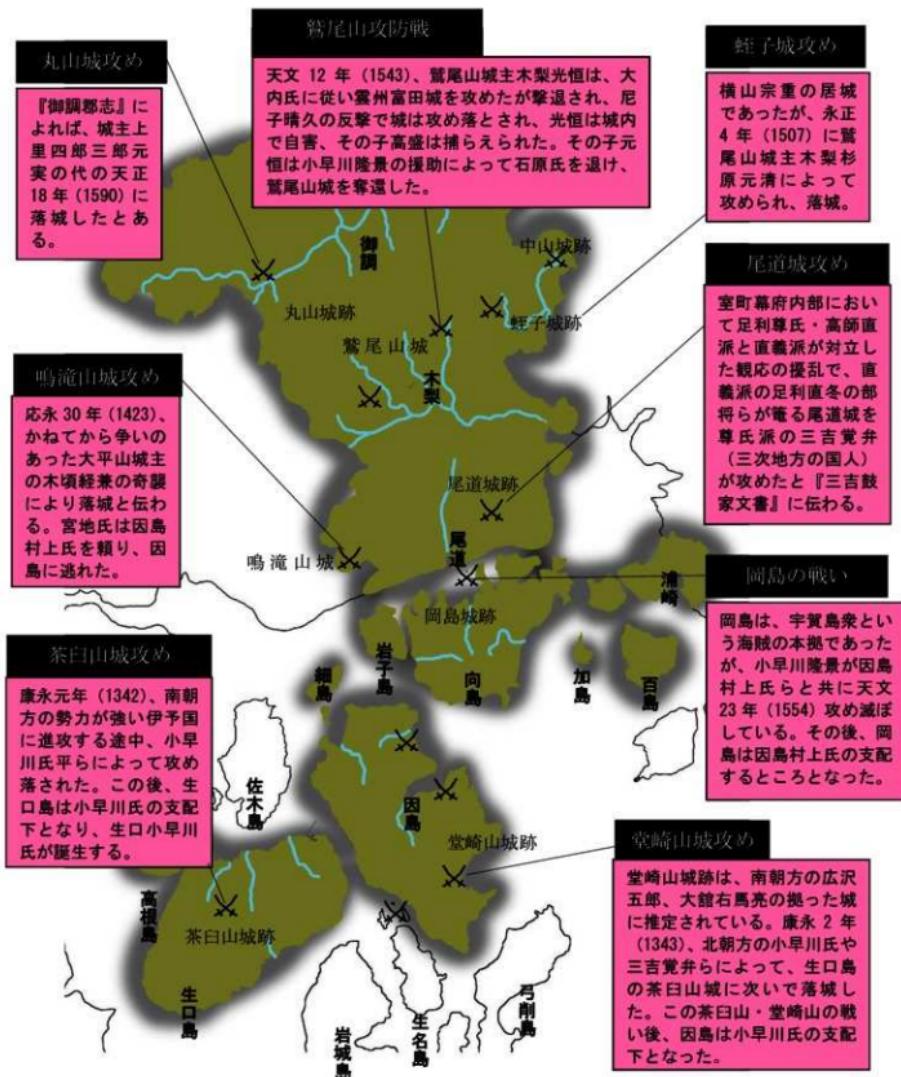
写真 発掘調査写真

この発掘調査によって、伝承の不確かな内容に迫り、それを覆す成果を得られたことは、地域社会の歴史の正確な理解につながる一歩となっています。

俵崎城跡の壁土と瓦 俵崎城跡の一郭で検出された建物跡(SB1)は、周辺に火を受けた自然石や炭化物、焼け固まった土などが確認され、建物の壁面と考えられる赤く変色した壁土が出土しました。このことから火災に遭った建物と考えされました。壁土には、木舞竹（こまいたけ、壁の下地として縦横に組んだもの）や木舞を結んだひもの痕が見られます。この壁土と共に、火を受けた軒丸瓦や平瓦も出土したことから建物には瓦が葺かれていたことが推測されました。この建物は、倉庫を考えることもできますが、1郭の中でも海上の見通しが良い位置に造られていることや、西側斜面からの攻撃に対して側面から防御できる位置にあることから、見張りや防御に関わる建物跡の可能性も考えられます。中世の城跡には様々な形態が見られますが、大規模な城や館を除いて、建物が多く建てられることはなく、瓦葺きの建物にいたってはほとんど確認されることはありません。瓦は、当時では富の象徴でもありましたし、瓦が葺かれるような頑丈な建物を当城跡のような小規模城に建てることは珍しく、特異な事例と言えます。

5 城をめぐる戦い

現在、山城は何事も無かったかのように自然の山の姿を見せてています。しかし、これら山城の中には、壮絶な戦いの歴史を秘めたものも数多く存在します。伝承や文献史料による推定によって、尾道周辺でも城をめぐる戦いが行われていたことが分かっています。



6 海賊衆と海城

芸予諸島は古代より海賊行為が行われ、中世には海賊衆でありながらも国家的また慣習的に認められた集団が存在していました。瀬戸内海を東西に行き来するためには、必ず芸予諸島を通らなくてはなりません。つまり、物資を載せた船が自ら網に飛び込んで来る芸予諸島は、海賊の発生と活動の最も適した場所だったのです。

芸予諸島において最も有名な海賊衆は、主に戦国時代で村上水軍として活躍した能島、因島、来島の三島村上氏です。これら三家は、拠点となる城の立地のよさもあり、瀬戸内海で大いに勢力を振るっていました。

その他、芸予諸島周辺には、宇賀島衆（尾道）、生口氏（瀬戸田）、内海衆（吳市安浦町内海）、蒲刈多賀谷氏（蒲刈島）、倉橋多賀谷氏（倉橋島）、吳衆（吳市）、野間氏（広島市安芸区矢野）、厳島神主家神領衆（廿日市市）などの海賊衆・警固衆がおり、それぞれが制海権を手中にしようとせめぎ合い、時には戦国大名などの家臣團に組み込まれて戦いを行うこともありました。

戦国時代における水軍力は、戦国大名にとって軍事、兵・物資輸送の観点から、ぜひとも手元に置きたい力であったため、積極的に家臣に組み込もうとする働きかけが見られました。

沼田に本拠を置く小早川氏は、芸予諸島の航行管理と水軍を手に入れるため、因島村上氏と関係を強め、その所領の安堵などにより、因島村上氏の水軍を小早川水軍とともに、毛利氏の勢力の中に組み込むことに成功しました。これにより、毛利氏は有力な水軍を手に入れ、太内氏や近畿地方の勢力との戦いを有利に進めたのです。

こうした海賊衆は、それぞれ拠点となる城を持っていました。それが、海城です。



船かくしと考えられる入り江



青陰城跡から島々を望む

海城とは、水軍力を持った海賊衆などの海上勢力が築いた城で、山城と同様に城郭を構えていますが、棧橋・岩礁ピット・船だまり（船の潮待ち、風よけのための停泊地）・水場（給水施設）などの施設が設けられ、海と潮流が堀と土星の役割を果たした独特の城を指します。

海城には、島を丸ごと城塞化するもの（能島城跡：愛媛県今治市）、岬に築かれ船の航行を監視するもの（美可崎城跡・丸山城跡）があり、これらの城は海上交通の要衝に立地して「海の閑所」として存在し、船を見つけては関料や礼銭を受け取り、従わない者は海に沈めていました。

因島村上氏の本拠となった因島や向島にも、海城の機能を持っていたと考えられる城跡が残っています。長崎城跡、美可崎城跡、丸山城跡、余崎城跡、岡島城跡などがこれに当るものと考えられます。

IV 中世寺院と石造物

1 尾道の石造物

全国的な石造物の変遷と同様、尾道でも鎌倉時代以降造立された石造物が遺っており、今日まで大切に守られてきました。古刹が多いこの町にはそれだけ多くの石造物がありますが、単に数が多いだけではなく歴史的に価値のある石造物として国の重要文化財に指定されているものもあります。

層塔

例 1 重要文化財 光明坊十三重塔

(瀬戸田町御寺、永仁二年(1294)、総高：8.14m)

銘文：(基礎背面)「釈迦如來造法 二千二百二二(四)

十参年奉造立之 永仁二年甲午七月日」

花崗岩製。西大寺の興正菩薩の弟子忍性建立と伝わる。笠石は肉質が厚く力強い反りを示すが、上にいくほど厚みは減少している。遠近法を取り入れてより高く、重厚さを感じさせる緻密な計算がなされている。



例 2 尾道市重要文化財 薬師寺七重塔

(因島原町、正和四年(1315)、総高：3.3m)

銘文：「正和■年三月十六日」「願主■■」

花崗岩製。広沢五郎率いる生口南庄の郷士の靈を慰める供養塔として建立との寺伝。鎌倉時代後期の七重塔の基準となる。



宝塔

例 重要文化財 浄土寺納経塔

(東久保町、弘安元年(1278)、総高：2.8m)

銘文：(塔身)「弘安元年戊寅十月十四日

孝子吉近敬白 大工形部安光」

定証の浄土寺中興以前に伽藍の修繕に尽力した、外護者光阿弥陀仏の子光阿吉近が父の供養塔として建立。昭和三十九年、これを2mほど移動させた時、塔内から法華經・香の包・石塔の由来を墨書きした木札が、金銀箔を押した竹筒に納められて



出てきた。塔身・露盤・請花の形態は古調で、全体的に重厚豪快な鎌倉時代の逸品とされる。

五輪塔

例 1 西國寺三重塔脇五輪塔

(西久保町、鎌倉後期～南北朝、総高：2.9m)
花崗岩製。杉原氏墓との伝承あり。



例 2 尾道市重要文化財 福善寺五輪塔（2基）

(鎌倉後期、総高：2.67m、2.68m 以上)
木梨杉原氏の配下、持倉氏のうち持倉則秀・則保父子の墓との伝承あり。



例 3 広島県重要文化財 光明坊金銅有頭五輪塔

(瀬戸田町御寺、平安～鎌倉、総高：6.45m)
金銅製。空輪部の先端は尖っており、火輪部の頂部には方形の露盤が設けられている。水輪部は有頭、地輪部は極端に低い形となっている。石造五輪塔の初期の形式を考える上で参考となる。

例 4 光明坊五輪塔群

(瀬戸田町御寺、鎌倉後期～江戸前期、
総高：1.5m)
寺伝によると、後白河法皇の皇女・式子内親王は、出家し法名を如念と改め、今出川左大臣の娘松虫と鈴



虫とともに来島し、光明坊で一生を過ごした。また如念の師である法然上人も、讃岐に流される途中に同寺を訪れている。法然上人塔・如念塔は鎌倉後期、松虫・鈴虫塔は南北朝～江戸前期のものとされる。

一石五輪塔

例1 浄土寺長足五輪塔（五輪卒塔婆 2基）

（東久保町、弘安頃（1278～1286）、総高：2.54m、2.18m）

結界石として、浄土寺の西と東に確認されている。



写真 結界石（西）



写真 結界石（東）

例2 正授院大日如来奉献塔

（長江一丁目、慶長2年（1597）、総高：2.71m）

銘文：「備州御調群（ママ）尾道浦道海居士」「慶長二年丁酉正■ 十二月吉祥日正真」
花崗岩製。道海は尾道浦町役人を務めた小川道海。大日如来坐像を彫刻。背部は舟形。

宝篋印塔

例1 重要文化財 浄土寺宝篋印塔（越智式）

（東久保町、貞和4年（1348）、総高：2.92m）

4名の逆修（生前に自分の死後、または年長者が若い死者の供養をする）と、光考らの追善（死者の冥福を祈り、功德を積む）のために建立。塔身と基礎の間にある、請花・反華の二重蓮華座の基台は備後南部・伊予地域の宝篋印塔に見られる特徴。基壇・基礎には多めの段数が、また基礎上部の曲線の集合・椀のような輪郭をもつ格狭間が装飾性を豊かにしている。南北朝期を代表する塔。



例 2 重要文化財 浄土寺 伝足利尊氏供養塔

(東久保町、南北朝時代、総高：1.88m)

花崗岩製。隅飾突起が少し外に反り返り、南北朝時代の特徴をのこしている。基礎に適確に刻まれた格狭間や安定感のある相輪など、全体的に均整がとれたつくりとなっている。



例 3 重要美術品 万福寺宝篋印塔

(西藤町、貞治 3 年 (1364)、総高：2.4m)

銘文：「右志趣者為 法界有情也 貞治三年甲辰

仲春十三日 大願主貞阿 大工行信」

花崗岩製。基礎の蓮花、格狭間、笠部の隅飾、塔身の造りが優れており、伊派と思われる石工の作塔としての規準となる。基礎上縁には中央に大きく複弁を 1 つ、隅にも大きな複弁を配し、複弁の間には小振りの複弁を刻出。また、基礎には格狭間が見られ、笠部の隅飾は輪郭付きの二弧を刻出し、輪郭内に蓮華座上に月輪がある。こうした装飾が大変優れており、伊派と思われる石大工の手による作塔として規準となり得るものである。



例 4 尾道市史跡 弁天小島

(因島町原町、室町時代、総高：1.8m)

弁天小島の頂上に立つ。塔身に仏像を刻出。かつて弁天小島は薬師寺の飛地であった。



例 5 尾道市重要文化財 光明寺石造宝篋印塔

(東土堂町、南北朝～室町初期、総高：2.02m)

寺伝では、道宗雙救上人開山塔とする。特別な人に対するあつい礼を示す場合に用いる、四方格狭間が見られる。



例 6 尾道市重要文化財 地蔵院宝篋印塔

(瀬戸田町沢、鎌倉時代末～室町時代、総高：1.75m)

基礎には三面に格狭間を飾り、塔身には金剛界仏の種子を刻んでいる。鎌倉末～室町にかけての塔の特徴をよく表している。生口氏関係の墓と推測される。

無縫塔

例 妙得寺無縫塔

(原田町、南北朝～室町中期、総高：72.3cm)



板碑

例1 尾道市重要文化財 薬師寺板碑（5基）

(因島原町中井津、室町時代、

高さ：1.6m、1.09m、1.08m、1.07m、1.1m)

室町時代初期から盛んになった十王信仰に基づき、死者の供養塔として造立。



例2 尾道市重要文化財 明徳寺十三仏種子板碑

(因島三庄町、慶長4年（1599）、総高：1.31m)

銘文：「奉權大僧都有遍 四七歳 逆修」

慶長四己亥年 十月廿一日」

虚空菩薩像の梵字を刻印。明徳寺の僧有遍が47歳の時、逆修のために造立。

例3 妙宣寺板碑形墓碑

(長江一丁目、貞治3年（1364）、総高：1.67m)

銘文：「長恩山妙宣寺開基大覺僧正 貞治甲辰四月三日 造立并海岸沙門日延敬白」

一見、板碑に見えるが、上部に2条の線が見られないことから、「塔」としている。開山大覺大僧正の墓碑として日延が造立。

例4 浄土寺釈迦三尊仏名号岩

(東久保町、元徳4年（1332）、総高：2.34m)

銘文：「元徳二壬申年四月日 願主如願」

円相の中に、釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩を表す梵字を陰刻。元徳四年に如願が釈迦三尊を浄土寺山に彫ったもので、備後地域では最古の自然岩板碑。

例5 正授院廻国塔

(長江一丁目、天正16年（1588）、総高：2.38m)

銘文：「十羅刹女 備後州住至崖道海居士 下總州日空上人六十六部正得」「三十番神下總州賢藏坊六十六部中將」「天正十六戊子八月日萬事皆如■（夢の夕がヒ）」

「奉納大乗妙典一國六部成就」

小川道海が造立。六十六部として、書写した法華経を全国六十六カ所の靈場に一部ずつ奉納しながら諸国の社寺を回った際にこれを建立。

磨崖仏

例 1 尾道市重要文化財 千光寺阿弥陀三尊磨崖仏

(東土堂町、寛正 2 年 (1461)、総高 : (岩の高さ) 1.2m、
(像高) 43.5cm、44cm、47cm (勢至菩薩・阿弥陀如来
・観世音菩薩の順))

勢至菩薩・阿弥陀如来・観世音菩薩を彫刻。三体の光背を舟形に彫り下げ、薄肉彫りにしてある。一部に朱色が残っており、造立当初は彩色されていたものを思われる。



例 2 尾道市史跡 地蔵石 (鼻の地蔵)

(因島三庄町三ヶ崎、慶長 4 年 (1599)、

総高 : 5m)

銘文 : 「慶長四年 春心道喜禪定尼 世一歳阿摩■」

「奉造備後因島 金山■松 室江可逆修

八月廿四日」

延命地蔵菩薩坐像を刻出。この地蔵に詣り小石を持ち帰ると子を授かり、安産も叶うとの言い伝えあり。



例 3 尾道市重要文化財 千光寺逆修塔 (2 基)

(東土堂町、天正 17 年 (1589)、総高 : 1.41m)

銘文 : 「松巖■■禪定門 松溪妙通禪定尼 天正十七年己丑 二月時正 逆修」

「阿性禪定尼送 (送) 修 天正十七年己丑二月廿五日」

花崗岩製。舟形の石に 1 基は二尊仏を、1 基は一尊仏を自然岩に彫刻。ともに逆修目的。

水船 (石曹)

例 尾道市重要文化財 光明坊水船 (2 基)

(瀬戸田町御寺、総高 : 60cm・40cm)

花崗岩製。大 : 上縁一部欠損。一石から作られている。底に水抜け穴あり。

小 : 4 枚の石を組み合わせて作製。



底に水抜け穴あり。

(■は解読不明文字を示す。)

2 石造物が語る歴史

石造物は美術品としての価値も有しています。宝篋印塔などは、相輪から基礎まで細部にわたって細かい装飾が施されています。先に紹介したように、西藤町の万福寺宝篋印塔は造立当時の特徴的な装飾が遺っていることが評価され、国の重要美術品に指定されました。石造物は、様々な視点から考察が可能ですが、ここでは以下の3つの視点から石造物が語る歴史を読み解いていこうと思います。

①石造物の「銘文」

石造物を造る人々を「石工」と言います。文政5年（1822）の史料には、その技術が買われ、広島城下町の形成にあたって多くの尾道石工が移住したという記述があります。また尾道で造られたものは全国的に有名となり、彼らの手によって造られた石造物は、福山や三原など尾道の周辺はもちろん、愛媛県や新潟県まで広がっています。

高い技術力をもった石工たちは、近世に入って突然登場してきたとは考えられません。しかし中世の尾道の石工に関する史料はあまり遺っておらず、詳細はよくわかつていません。そこで手がかりとなるのが、石造物に刻まれた「銘文」です。

石造物の中には製作者名や作製年月日、目的などが刻まれていることがあります。これを銘文といいます。瀬戸田町の光明坊にある重要文化財に指定されている十三重塔の基壇には「石工心阿」と刻銘されています。心阿の名は三原市の宗光寺七重塔、兵庫県朝来郡の鷺原寺不動尊、神奈川県箱根山中の宝篋印塔、神奈川県鎌倉市の安養院宝篋印塔にも遺っています。

この「心阿」という人物についての詳細は分かっていません。しかし、安養院・鷺原寺・光明坊には、西大寺の僧叡尊の弟子良觀（忍性）が訪れているという共通点があります。光明坊の寺伝では、忍性が十三重塔を造立したと言われています。

叡尊は奈良の西大寺という寺の長老を努めた人物で、文永11年（1271）の蒙古襲来のおりには祈祷により敗退させたと云われています。彼は人々の「二世安楽」、つまり現世だけでなく来世の安穏も祈り活動を続けました。忍性ら彼の弟子はこの教えを継いで、各地で勧進活動を行いました。そして多くの人々が「二世安楽」を願い、私財だけでなく労力も投じて、寺や石造物の造立に参画しました。しかし寺を建立するにも、石造物を造るにも僧だけでは困難です。そこで活躍したのが石工技術を持った伊行末を祖とする伊一派でした。叡尊の教えを拡めるべく各地に赴いた弟子たちには、こうした石工集団が随行していたと思われます。

ここまで整理した上で、改めて心阿について考えてみます。心阿作の石造物が遺っている寺には、いずれも西大寺の僧侶の足跡がうかがえます。また、先に西大寺と伊派の関係を確認しました。これらのことから、「心阿」は僧に随行した石工集団の1人だったのではないかと推測できます。つまり、光明坊十三重塔の「石工心阿」という銘文からは、高い技術を備えた石工が尾道に先進技術をもたらし、後にこの地に定着していったことが考えられるのです。

②石造物の‘形状’

西國寺の三重塔脇にある五輪塔は千光寺山城主・杉原氏元恒の墓との伝承がありますが、14世紀まで遡ることができ、伝承と一致しないと言われています。この五輪塔と、今高野山塔の岡五輪塔（世羅町）、福善寺五輪塔（長江）、石手寺五輪塔（愛媛県）の特徴は、大和西大寺奥之院の叡尊五輪塔と共に通しています。叡尊五輪塔は、鎌倉時代後期を代表する西大寺系五輪塔の祖形とされています。この五輪塔を忠実に踏襲しようとしたのが定證です。定證も先ほど紹介した叡尊の弟子の一人で、浄土寺を瀬戸内における西大寺律宗の中心的寺院としようと尽力しました。定證は尊崇する叡尊の墓塔を強く意識し、叡尊墓に似せて定證自身の墓も造ろうとしたと思われます。この思いから造立されたのが浄土寺墓地にある花崗岩製の大型五輪塔です。

西國寺の三重塔脇五輪塔は、この定證五輪塔に近似しています。通常長方形に地輪を造るのに対し、両五輪塔ともそぞが広がっています。このように当時尾道周辺では、師にあやかろうと定證五輪塔を契機に叡尊墓を模倣しようとする動きがあったと考えられます。

また、歴代住職の墓と言わされている西國寺墓地五輪塔（いずれも南北朝時代末、もしくは室町時代初期の造立と推定）の地輪もそぞが広げており、一連の形式が連続して見受けられます。このように「一定の技術的系譜のもとに継続して造立され」ていたということは、近世に広く展開した尾道石工の成立を考える上で注目すべきことです。つまり、南北朝時代～室町時代初期には尾道の石工集団が成立していた可能性があるのです。この背景には、良質な石が入手しやすかったという環境的な利点だけでなく、心阿のように近畿から優れた技術を持った石工を呼び寄せるなどして、造寺・造塔に不可欠の石工技術がこうした背景の中で定着していったと推測されています。



西國寺墓地歴代住職五輪塔



浄土寺定證五輪塔



西國寺三重塔脇五輪塔

③石造物のある‘場所’

全ての石造物に銘文があれば、その石造物の性格を知ることができます。しかし現在遺っているものは、例え銘文があつても長い年月の間に風化してしまい、はっきりと見えないものがたくさんあります。そこで手がかりとなるのが石造物のある‘場所’です。

御調町中原には、宝篋印塔の笠部や五輪塔、石仏などの石造物群が遺存しています。その

中に交じって 1 基の板碑があります。この板碑は、造立者であると思われる有賀の名と「天正十四祀 丙戌十月日」という造立年が確認できます。しかし銘文を確認できても、有賀がどういった人物であるか不明のため、これらが何のために造られたかは、石造物だけでは知ることはできません。そこで鍵となるのが、この石造物群がある場所です。

中原は大町の東北に位置します。大町といえば、Ⅲ章で紹介した森光新四郎景近の城と伝わる牛ノ皮城跡がある場所です。牛ノ皮城に近い中原には、かつて森光氏の菩提寺である先源寺という寺があったと伝えられ、これら石造物群は城主の墓ではないかと云われています。

また、御調町市には本照寺という寺があり、裏手には天正 5・6・14 年の年号を確認できるものなど、全 19 基の五輪塔が遺っています。この寺は、市の南西に位置している雲雀山城主・池上氏の菩提寺でした。雲雀城は山頂に築かれていますが、平素城主は山麓の居館により、その居館が本照寺付近と考えられています。以上のことから、これらの五輪塔は、雲雀城城主池上氏の墓と伝えられています。現在は尾道市史跡に指定されています。

ただし、この 2 例は山野に埋もれるなどしていたものを後に一ヶ所に集積したものであり、あくまで推測の域を出ません。しかし、このように石造物が何故そこにあるのかを考えることで、その石造物の性格を知る手がかりとなります。



伝 雲雀城主墓石群

また、中世の城跡周辺だけでなく、寺社にも数多くの石造物が存在します。寺社は、人々の信仰の拠り所というだけでなく、聖域として、武家勢力などの力が及ばない場所でもありました。そうした場所に石造物を置くことは、人々の信仰を深めることであり、神仏に対する敬意を表すことでもありました。そうした行為は、現在の寺社でもみることができます。こうした石造物は、寺社の歴史そのものであるとも言えます。

このようにさまざまな角度から光をあてることで、石造物はいろいろなことを教えてくれます。与えてくれる情報と時代背景を考え合わせることで、今まで知られていなかった歴史の一部を解明することができます。中世に形成された石工たちの礎を見出せたことは、尾道の歴史を知る一歩となりました。今後もこうした石造物の調査研究を続けることで、これまで明らかにされなかった尾道の歴史が解明される可能性があります。